

館蔵品展「昔の道具とくらし」出品目録

〔会期:令和3年2月6日(土)～7月11日(日)〕

当館では長く後世に高岡の歴史文化を伝えるために、日頃、郷土の歴史・民俗・伝統産業などに関わるさまざまな資料を収集しています。

収集したそれらの資料は調査・整理し、適切に保存・管理して、その成果を展示や教育普及（講演・講座など）、情報公開などに幅広く活用しています。

本展では、当館が収蔵する衣・食・住をはじめとした古い生活道具類「民具」に焦点をあて、それぞれの民具がもつ歴史や用途に加え、その時代を生きた人々の暮らしについて展示・紹介します。明治・大正・昭和・平成と時代が進むにつれ、私たちの生活様式も大きく変化してきました。そうした変化を、民具をとおして当時の生活を再発見していただく機会になればと考えております。

最後に、本展開催にあたり貴重な資料をご寄贈いただきました皆様、関係各位に厚く感謝申し上げます。

No.	資料名称	年代	点数	寸法 (縦×横, cm)	備考	所蔵 (寄贈者名)
1	すげがき 菅笠		1	径52.0×高 12.5	主に雨具や日よけに使われた。高岡市福岡地域では、古くから菅(すげ)が栽培され、その菅で笠が生産されてきた。平成21年(2009)には「越中(えっちゅう)福岡の菅笠製作技術」として、国の無形民俗(むけいみんぞく)文化財に指定された	当館 (神保成伍氏)
2	カンカン ^{ぼう} 帽	大正中～昭和初期	1	径20.6×高9.6	麦藁(むぎわら)帽子。麦藁をプレスして、糊(のり)やニスなどで塗(ぬ)り固めているため、軽くて丈夫(じょうぶ)である	当館 (富田保夫氏)
3	写真「着物姿でカンカン ^{ぼう} 帽を被る男性」(複写)	昭和初年頃	1	—	日本では男性の夏のフォーマルな帽子として広まった。叩くとカンカンと音がするため、カンカン帽ともいわれる	【昭】
4	モジリ ^{まきそで} (巻袖)		1	身丈83.0×衿 60.0	女性用の仕事上着。袖口(そでぐち)が細いため、仕事やしやすく、重ね着もできる	当館 (吉田元太郎氏)
5	そでな 袖無し		1	身丈63.0×衿 39.0	袖がない腰丈(こしたけ)ほどの短い上着。農作業時や、少し寒い時に作業衣や着物の上に着た。「ドーゲン」ともよばれる	当館 (藤田よしえ氏)
6	もんぺ		1	丈80.0×腰回 94.0	女性の農作業用の野良着(のらぎ)。戦時中からの女性の日常着だった	当館 (国奥定治氏)
7	たらい 盥		1	径60.0×高 22.5	洗濯用の盥(たらい)。夏は盥でスイカやビールを冷やすのにも使われた	当館
8	洗濯板(せんたくいた)		1	幅55.0×奥行 55.0×厚1.6	洗濯盥に湯や水を入れて、洗濯板を立て掛け、衣類を板の凹凸(おうとつ)の溝(みぞ)にこすり合わせて汚れを落とす。女性の大切な嫁入(よめいり)道具の一つでもあった	当館 (谷道俊雄氏)
9	写真「盥と洗濯板で揉み ^も 洗い ^{あら} 」(複写)	昭和30年代以前	1	—	盥に水を入れ洗濯物を浸(つ)けて、しゃがんで洗濯板を使い、石鹼(せっけん)をこすりつけながら揉(も)み洗いする	【昭】
10	たけがせぞうり 竹皮草履		2	幅12.0×奥行 22.5	一足。竹の皮を編(あ)んだ底の部分に鼻緒(はなお)が付けられた草履(ぞうり)。底が半分ほどの長さしかない「足半(あしなか)草履」もある	当館 (富田保夫氏)
11	わらながぐつ 藁長靴		2	幅10.9×奥行 25.0×高34.0	一足。雪の中で履く藁製(わらせい)の長靴。底が草鞋(ぞうり)になっていて、取り外しができる。爪先(つまさき)部分が割れており、履(は)いてから縄(なわ)で縛(しば)るため、隙間(すきま)から雪が入らないようになっている	当館
12	げた 男物用下駄		2	幅10.7×奥行 23.0×高10.0	雨天や雪道の歩行に履いた。歯は減ったら差し替えることのできる「差歯下駄」である	当館 (西田弘氏)

13	女物用高足駄 たかあしだ	昭和40年 (1965) 頃	2	幅22.5×奥行 10.0×高11.5	雨天時や雪道の歩行に履いた。爪先 (つまさき) に覆 (おお) いを付けた「爪掛 (つまがけ) 」は、保温のためと爪先が濡 (ぬ) れるのを防ぐためのもの。「足駄 (あしだ) 」〔高下駄 (たかげた) 〕は、差し替えできる底の歯が高く作られている。未使用品	当館 (山田館夫氏)
14	箆筒 そうけ		1	幅52.0×奥行 45.0×高21.0	北陸や西南日本での箆 (ざる) の地域名。野菜を洗ったり、研 (と) いだ米の水を切る。食材などを干すのにも使う	当館 (田中為雄氏)
15	金森佐兵衛作《鉄瓶》 さへえさく てつびん		1	径10.0×高 19.5	湯を沸 (わ) かしたり注 (そ) いだりする道具。金屋町の鋳物 (いもの) 職人・金森佐兵衛の作。高岡銅器 (どうき) (鋳物)の歴史は、高岡開 (かい) 町 (ちょう) (1609年)間もなく、前田利長 (まさなが) が、現高岡市戸出 (い) 西部金屋 (にしづかなや) から7人の鋳物師 (いもじ) (鋳造 (ちゅうぞう) 技術者)を呼び寄せたことに始まると伝わる。金森家もその流れをくむ家系で、特に4代佐兵衛(1847～98)は、「金寿堂」を屋号 (やごう) として用いた鉄瓶 (てつびん) の名手 (めいしゅ) だった。	当館
16	鉄鍋 てつなべ		1	径30.4×高 17.2	囲炉裏 (いろり) や竈 (かまど) に掛けて、汁物や煮物などを煮炊 (く) した。大鍋では大量の里芋やさつま芋などを煮る	当館
17	鉄製羽釜 てつせい はがま		1	径43.0×高 33.0	ご飯を炊 (た) く鉄 (てつ) 製の釜 (かま) 。竈 (かまど) にかけるための鰹 (かつ) を羽 (は) に例えて「羽釜 (はがま) 」という。鉄の鍋 (なべ) 釜 (かま) は、高岡開 (かい) 町 (ちょう) (1609年)以来の金屋 (かなや) 町の特産品だった	当館 (筏井晴夫氏)
18	アルミ製羽釜	昭和20年代以降	1	径32.0×高 19.7	アルミ製の釜。高岡市街は、戦争で米空軍 (べいこうぐん) の空襲 (くうしゅう) の被害を免 (まぬ) かれた。兵役 (へいえき) を終えた鋳物 (いもの) 業者は銅器 (どうき) 生産の設備を利用し、軍需物資 (ぐんじゅぶつ) ではなくなったアルミニウムで生活用品(鍋・釜)を大量に生産した。戦後の物資不足で、アルミ製の鍋や釜は多く売れたという	当館
19	陶製釜 とうせい はがま	昭和14～20年 (1939～45) 頃	1	径21.8×高 15.0	戦時中の金属 (きんぞく) 代用品 (だいうひん) 。戦時中の「金属供出令 (きんぞくきょうしゅつれい) 」により、家の中にある金属製品を全て差出し、代わりに木や陶器の代用品を使うことを強制された	当館 (五嶋孝一氏)
20	写真「竈に掛けられた羽釜と自在鉤に下げられた鉄瓶」(複写) かまど か はがま じざいかぎ さ てつびん	昭和34年 (1959年) 頃	1	—	竈 (かまど) に羽釜 (はがま) が掛 (か) けられ、その隣 (となり) に自在鉤 (じざいかぎ) に下げられた鉄瓶 (てつびん) がある。竈の焚口 (たきぐち) の前には火箸 (ひばし) がある。写真奥の薪 (まき) を燃やしている	【台】
21	東芝自働式電気釜 とうしばじどうしきでんきがま	昭和30年 (1955)	1	径33.3×高 25.3	国産第1号の電気釜(炊飯器)。東芝 (とうしば) (発明は協力会社の光伸社)製。主婦の家事労働 (かじろうどう) 時間を大幅 (おおはば) に減 (へ) らし、生活様式に大きな変化をもたらした	当館 (有澤康夫氏)
22	お櫃 ひつ		1	径31.6×高 23.4	炊 (た) きあがったご飯を釜 (かま) から移 (うつ) し入れて保存 (ほぞん) しておくための道具。冠婚葬祭 (かんこんそうさい) 用のものに漆塗 (うるしぬり) のものもある。夏は炊いたご飯が腐 (く) りやすいので木製のお櫃 (ひつ) は使用せず、竹製のものに入れておいた。冬は、稲藁 (いなわら) で作った蓋付の入れ物に飯櫃 (めしびつ) を入れて保温した	当館
23	箱膳 はこぜん		1	幅31.0×奥行 31.0×高17.0	一人用のご膳 (ぜん) 。箱の中に茶碗 (ちやわん) ・箸 (はし) ・皿などを入れておき、食事の時に蓋 (ふた) をあおむけて置 (お) き、上に茶碗を並べてご飯を食べる。食事後は中へ食器をしまっておく	当館

24	写真「箱膳で食事をする家族」(複写)	昭和32年(1957)頃	1	—	各々(おのおの)が箱膳で食事をとる風景	【台】
25	通い德利 ^{どつくり} (高岡通町 ^(とおりまち) ・富田醤油 ^(しょうゆ) 店)	明治末～昭和初期	1	幅14.5×高26.0	酒屋 ^(さかや) や醤油店 ^(しょうゆてん) が貸 ^(か) し出す德利 ^(とつくり) 。客はこれを店に持っていき、必要なだけの量の酒や醤油を購入 ^(こうにゆう) した。代金はつけ(後)払 ^(はら) いで、お盆 ^(ぼん) と年末にまとめて支払った。貸德利 ^(かしたつくり) 、貧乏 ^(びんぼう) 德利ともよばれる	当館
26	じざいてしよく 自在手燭		1	幅19.8×奥行10.1×高13.2	蠟燭 ^(ろうそく) を立てて持ち運 ^(はこ) ぶ移動用 ^(いどうよう) の燭台 ^(しよくだい) 。垂直 ^(すいちよく) に立てて鴨居 ^(かもし) ・長押 ^(ながし) などに引っ掛 ^(か) ける「掛燭 ^(かけしよく) 」にもなる	当館
27	ありあけあんどん 有明行灯		1	幅26.0×奥行26.0×高35.0	部屋の照明 ^(しょうめい) 道具。持ち運びができる。油の入った皿に、綿糸 ^(めんし) や藺草 ^(いぐさ) などで作った灯芯 ^(とうしん) を入れて点火 ^(てんか) した。夜明けまで常夜灯 ^(じょうやとう) として使用されたので、「有明行灯 ^(ありあけあんどん) 」と呼ばれた	当館 (斉藤尚司氏)
28	いえちやうちん 家提灯	昭和期	1	径44.6×高75.0	中に蠟燭 ^(ろうそく) を入れて明かりをとる道具。日 ^(ひ) の丸 ^(まる) の紋 ^(もん) が入っていることから、祭りや行事などに使われたものと思われる	当館 (米森米太郎氏)
29	かくとう 角灯		1	幅9.2×奥行9.2×高20.5	室内用照明器具。持ち歩くこともできる。家の中の移動や近所へ出かける時にも使用。電灯 ^(でんとう) が普及 ^(ふきゆう) したあとも、停電時 ^(ていでんじ) や懐中電灯 ^(かいちゆうでんとう) が普及するまで使われた	当館 (泉治夫氏)
30	写真「白熱灯 ^{はくねつとう} を使い勤務 ^{きんむ} する高岡青果市場 ^{せいかしじやう} の社員ら」(複写)	昭和15年(1940)以降	1	—	高岡市二番町にあった株高岡青果 ^(せいか) 市場(1940年設立)事務室で働く社員たち。天井には傘の付いた白熱電球 ^(はくねつでんきゆう) が2つ付いている。日本で初めて白熱電球が作られたのは明治時代の半 ^(なか) ば頃といわれ、昭和初期頃から多くの家庭で使われるようになった	当館 (原本・高岡市蔵)
31	れんたん 練炭コンロ	昭和後期	1	径23.4×高25.6	練炭 ^(れんたん) を中に入れて使用する。風で消えることなく長時間燃えるため、屋外 ^(おくがい) での煮炊 ^(にた) きや暖 ^(だん) をとる時に使う	当館
32	福岡市郎 ^{ちゆうぞう} 鑄造、吹田正光 ^{ちようきん} 彫金《鑄銅七福神文火鉢 ^{しちふくじんもん ひばち} 》	昭和40～50年(1965～75)頃	1	径56.7×高36.5	金屋 ^(かなや) 町の鑄物 ^(いもの) 職人・福岡市郎(1907～85)が鑄造 ^(ちゆうぞう) し、横田町の彫金師 ^(ちようきんし) ・吹田正光(1910～)が彫金した火鉢 ^(ひばち) 。七福神 ^(しちふくじん) と宝船 ^(たからぶね) の文様が彫金されている。火鉢(瓶掛 ^(びんかけ))は灰を入れて炭火をおこし、手足を温めたり、湯を沸 ^(わか) かしたりする暖房具 ^(だんぼうぐ) 。ストーブが登場して以降、徐々に ^(じょじょ) に衰退 ^(すいたい) していった	当館 (福岡良子氏)
33	ブリキ製湯たんぼ	大正～昭和初期	1	幅32.0×奥行24.0×高9.0	身体を温めるために湯を入れて寝床 ^(ねどこ) で使う道具。湯が冷めないように、注水口 ^(ちゆうすいこう) をできるだけ小さく作り、栓 ^(せん) をして使う	当館 (織田睦夫氏)
34	とうせい 陶製湯たんぼ	昭和戦中	1	幅22.9×奥行15.2×高9.4	中にお湯を入れて、手足や体を温めるための道具。やけどしないように布に巻いて、布団の中に入れて使った。「国策湯丹保 ^(こくさくゆたんぽ) 」とあり、戦時中の金属代用品である	当館
35	雪ばんば	明治～大正期	1	幅19.5×高129.0	除雪 ^(じよせつ) 用道具。雪を掘 ^(ほ) って掻 ^(か) き退 ^(の) けたり、屋根の雪下ろしなどに用いた。幕末 ^(ばくまつ) から明治期の高岡市伏木 ^(ふしき) を代表する廻船問屋 ^(かいせんどんや) の一つ・八坂 ^(やさか) 家(車屋 ^(くるまや))に伝わったもので、表と裏3ヶ所に商標 ^(しょうひやう) の焼印 ^(やきいん) 「〇」がみられる	当館 (今井昭次氏)

36	写真「置炬燵(おきごたつ)の図」(複写)		1	—	炬燵檣(こたつやぐら)とよばれる木枠の中心に、行火(あんか)または掘(ほ)り炬燵(ごたつ)を置き、上から炬燵布団(こたつぶとん)をかけて使われた	
37	こたつやぐら 炬燵檣		1	幅50.5×奥行50.5×高37.5	中に炭火を入れた行火(あんか)などをおき、布団の中で足を温めた	当館 (金刺亀太郎氏)
38	ねこごたつ(行火)		1	幅・奥行・高各25.0	中に炭火を入れて手足を温める道具。これを覆(おお)うように檣(やぐら)をのせ、その上に布団をかぶせて暖(だん)をとった	当館 (江渕安太郎氏)
39	こて 鰻		1	幅4.5×高37.8	炭火などの中にコテ部を差し込んで熱(ねっ)したものを、着物などの縫(ぬい)目(め)に当て、縫(ぬい)ったところを伸(の)ばしたり、折(お)り目をつけたりする道具。「焼きごて」ともいわれる	当館 (神保成伍氏)
40	ひ 火のし		1	径11.7×長37.7×高5.4	底の滑(なめ)らかな金属製の鍋の中に炭火を入れ、その熱を利用して底を布に当ててシワをのばすための道具	当館 (吉野作治氏)
41	すみび 炭火アイロン		1	幅21.0×奥行10.6×高19.7	アイロンの本体に火の付いた炭(すみ)を入れ、その熱で布のシワを伸ばした。上部には、煙(けむり)を逃(に)がし、空気を取り込むための煙突(えんとつ)が付いている	当館 (室崎信一氏)
42	はえと 蠅取り器		1	最大径17.8cm×最小口径3.4cm×高14.3cm	容器の中に水などを入れ、下に紙を敷(し)き、飯粒(めしつぶ)や砂糖(さとう)を置くと下部から蠅(はえ)が入り水に落ちる仕組みである。ガラス製	当館
43	せいた 背板		1	幅47.0×奥行77.0	荷物を担(かつ)ぐために背負(せお)う運搬(うんぱん)道具。稲(いね)や薪(まき)など、量の多い物を運ぶのに便利	当館 (堺喜十郎氏)
44	にないぼう 荷棒(背板用)		1	長71.5	疲(つか)れたときなど、荷物を背負(せお)ったまま荷棒(にないぼう)を背板(せいた)の下において支(ささ)えて休むことができる	
45	写真絵葉書「背板で馬屋(うまや)肥(ごえ)を運ぶ女性たち」(複写)	昭和8～19年(1933～44)頃発行	1	—	馬屋肥(うまやごえ)とは、家畜(かちく)の糞尿(ふん)や敷(し)き藁(わら)などを腐(くさ)らせて作る肥料(ひりょう)のこと。庄川(しょうがわ)(富山県西部)の近辺の農村にて	当館
46	ふみぐるま 踏車		1	幅158.0×奥行37.0×高93.5	羽の部分に人が乗って踏(ふ)むことにより、水位(すいい)の低(ひく)い用水などから高い田へ水を上げることができる道具	当館 (中井七郎氏)
47	写真「踏車で田に水を入れる」(複写)	大正期	1	—	踏車(ふみぐるま)で堀の水を上げる様子を写したもの。高岡古城公園池の端堀(はたぼり)にて	当館 (原本・高岡市蔵)
48	写真「龍吐水(りゅうどすい)」(複写)	江戸中～明治10年代	1	—	龍吐水(りゅうどすい)は、江戸中期頃に登場したといわれる日本初の消防ポンプ。横木をシーソーのように上下させることで、水が噴(ふ)き出す仕組み。これを大八車(だいはいちぐるま)に乗せて運んだ。その後、明治17年(1884)末に、国産の手動消防ポンプ「腕用(わんよう)ポンプ」が量産(りょうさん)されたことに伴(ともな)い、次第(しだい)に使われなくなった	当館 (原本・高岡市蔵)
49	写真「蒸気(じょうき)ポンプ」(複写)	明治末～大正期	1	—	富山県内初の蒸気(じょうき)ポンプの創設(そうせつ)は、明治33年(1900)であった。本市初の蒸気ポンプは同36年に導入され、高岡警察署構内に置かれた。蒸気ポンプ1台の価格は、当時の腕用(わんよう)ポンプ7台分に相当した	当館 (原本・高岡市蔵)

50	ひょうしぎ 拍子木		2	(各)23.4×3.4 ×厚3.1	方柱形(ほうちゅうけい)の二つの角棒(かくぼう)を両手に持ち、叩(たた)き合わせて合図(あいず)や拍子(ひょうし)を知らせる道具。主に火災予防(かさいよぼう)や警戒夜回(けいかいよまわ)りなどにも用いられた	当館 (玉井忠一氏)
51	ひけししょうぞく ずきん はんてん 火消装束 (頭巾・半纏・もんぺ・手袋)		5	[頭巾] 幅75.0×長55.5 [半纏] 丈97.0×衿62.0×袖丈31.5 [もんぺ] 総丈96.0 [手袋] 幅11.5×長22.0	火消し組が火災の時に着用した仕事着一式。全て丈夫(じょうぶ)な刺子(さしこ) (綿布(めんぷ)を重ねて綿糸(めんし)で細かく刺(さ)し縫(ぬ)いたもの) がなされている。半纏(はんてん)には、袂(たもと)の部分に「高岡／検番」とあり、背中には三本の白線に「五三(ごさん)の桐紋(きりもん)」が入っている	当館 (米澤暢晃氏)
52	まとい 纏		1	幅38.5×高265.2	木津(きつ)消防組の纏(まとい) (火災現場での目印)。もともとは戦国時代の戦場での目印「馬印(うまじるし)」だった。纏持ちは火消し組の花形(はながた)であった。棹(さお)の先に目印(陀志(だし))が付けられ、革製の馬簾(ばれん)が垂(た)れ下がっている	当館 (木津地区)
53	とびぐち 鳶口		1	幅15.4×奥行4.2×高152.2	火元より風下(かざしも)の建物を壊(こわ)して延焼(えんしょう)を防ぐ、江戸時代以来の「破壊消防(はかいしょうぼう)」の道具。櫓棒(かしぼう)の先に鋼鉄製(こうてつせい)の鉤(かぎ)が付けられる	当館 (木津地区)
54	しょうぼうぐみかくせいき 高岡消防組拡声器	明治27～昭和14年 (1894～1939)	1	径13.3×長27.1	高岡消防組時代(1894～1939年)に使用された拡声器(かくせいき)。「高岡消防組／第八部」とある。高岡消防組は、明治27年に県警察署長の下に置かれた27消防組の一つ。昭和14年には消防組と防護団(ぼうごだん)〔同年(1936)発足〕が合体した警防団(けいぼうだん)が組織され、戦時防空体制(せんじぼうくうたいせい)の強化へと繋がっていった	当館 (井波博氏)
55	はんしょう 半鐘	大正5年 (1916)11月	1	径33.5×高57.5	青銅製(せいどうせい)の小型の釣鐘(つりがね)。お寺の梵鐘(ぼんしょう) (鐘(かね)) に比べて小さいので「半鐘(はんしょう)」とよばれた。迪宮(みちのみや)裕仁(ひろひと)親王(しんのう) (昭和天皇。1901-1989) が、大正5年11月3日の「立太子(りったいし)の礼(れい)」で、皇太子(こうたいし)となられた記念に造(つく)られた。高岡消防団定塚(じょうづか)分団(第3分団)旧蔵(きゅうぞう)。有志の消防組員19名の名前が刻まれている。半鐘は、火(ひ)の見櫓(みやぐら)や梯子(はしご)の上に設置され、火事や天災などの非常時(ひじょうじ)に打ち鳴らし、住民に危険(きけん)を知らせたり、消防団を招集(しょうしゅう)する合図として使われた。	当館 (高岡市消防団定塚分団(第3分団))
56	写真(じょうび しょうぼうちやうしや) 「常備消防庁舎の開設」 (複写)	大正11年 (1922)	1	—	大正11年(1922)4月、高岡市片原横町(かたはらよこまち)に建てられた常備消防(じょうびしょうぼう)庁舎(ちやうしや)前で、仮装(かそう)自転車による防火(ぼうか)宣伝(せんでん)を行う消防員たち。本市消防常備制度は、大正7年(1918)に警察署内に常設所(じょうせつしよ)を設け、常備員6名を勤務させたことに始まる。本庁舎の開設により従来の常詰(じょうづめ)制が廃止(はいし)され、新たに14名の常備消防員を任命(にんめい)し、職務(しよくむ)にあたらせた	当館 (原本・高岡市蔵)

57	くうきおうようじどうしょうかき 空気応用自動消火器	明治33年 (1900)以降	1	幅19.5×高 55.5	鉄製(てつせい)で円筒型(えんとうけい)をした消火器で、「噴霧兼用(ふんむけんよう)」とある。上部の持ち手レバーを上下させると側部(そくぶ)のホースから消化剤(しょうかざい)が噴射(ふんしゃ)される仕組み。製造販売元(せいざいはんばいもと)・明正社(京都市)。日本初の国産消火器は、明治28年(1895)に丸山商会(現・株丸山製作所)で製造された「丸山式自動消火器」である	当館 (酢谷傳右衛門氏)
58	しゅりゅうだんしょうかき 手榴弾消火器	昭和27年 (1952)	3	[ガラス球] (各)外周32.9 ×高12.3	ガラス球型の消火器。炎(ほのお)に向かって直接投げ込むと、ガラス球が割れ、中の消化液が飛び散り消火するというもの。製造・株笠井商会(群馬県高崎市)	当館
59	チラシ「手榴弾消火器」 (複写)	昭和中期頃	1	—	株笠井商会が製造する手榴弾(しゅりゅうだん)消火器の販売チラシ。「日本一軽便(けいべん)なる／手榴弾消火器／五大特徴」とあり、使用法や効力、取扱(とりあつかい)方、低価格などの特徴が分かりやすくまとめられている	当館 (高岡源平町・神初豊一氏)
60	強力消火弾 だん	昭和中期頃	1	[ガラス瓶] 外周28.6×高 23.9	ガラス瓶(びん)型の消火器。ガラス瓶の中に液体の消化液(しょうかえき)が入っている。製造・大阪防火化学工業所。炎(ほのお)の中に直接投げ込むタイプの消火器は、通常の消火器よりも安価(あつか)で、消化液を詰(つ)め替(か)えする必要もなかったことから、広く利用されたという	当館
61	消防団帽子 ぼうし	昭和23年 (1948)以降	1	幅20.0×高 11.0	消防団員が着用する帽子。昭和14年(1939)に発足した高岡警防団(たかおかけいぼうだん)は同22年に解散(かいさん)し、翌23年には消防法の施行(しこう)により、高岡・伏木(ふしき)・新湊(しんみなと)の各消防署が開庁(かいちょう)した	当館 (米澤暢晃氏)

※所蔵先の写真の出典は、【台】『台所用具の近代史』(有斐閣, 1997年)、【イ】『イラストで見るモノのうつりかわり 日本の生活道具百科』(河出書房新社, 1998年)、【昭】『昭和のくらし博物館』(河出書房新社, 2000年)を示します。

※資料保存のため、一部展示替えをすることがあります。写真・図・複数資料の寸法は割愛しました。

計 61件72点